12 月中旬に至ると最早採集されなくなつた。 *C. trit.* は 6 月上旬より採集され急に増加し、7 月 30 日に所謂“山田の頂”を作り、次いで急に減少し 9 月下旬まで採集された。 *A. vex.* は 6 月中旬より採集され始め、急激に増加し 7 月に山を、8 月中旬に一つの谷を描き 9 月上旬に再び高い山を描くが、9 月上旬には採集されなくなつた。 *Anoph. hyr.* は 7 月中旬より採集され、いくつかの明かな山を描くが 11 月中旬になると採集されなくなつた。雄が採集されたのは *C. pip.* のみで、3 月下旬に採集され始め、その後週期的に雄の比率が高くなるのを認めた。吸血した *C. pip.* は 3 月下旬より採集され、その後雄率と略々同じ週期で吸血率も上下した。即ち著者等が既に報告した蚊の一斉羽化の現象が推定された。因みに東京都内で 1949 年以來の蚊の季節的消長曲線と日本脳炎流行発生時期との関係を考察した。之を要するに日本脳炎の流行発生は *C. trit.* の“山田の頂”から 1~2 週遅れて発生するのでなく、*C. trit.* の発生出現上昇期から 1~2 週遅れて流行前駆期における散発例の発生をみることは、図から容易に看取される。〔国立予研〕

誌上発表

防殺虫燻煙剤の研究 III. シャツを燻煙した場合の殺虱効果について

兒玉 威・原田文雄・石井襄二・中川ため

Kodama, T., Harada, F., Ishii, J.
& Nakagawa, T., Studies on the
insecticides by insecticidal smoke
generator III On the control of lice

私どもはさきに、BHC 燻煙剤を使用した場合のハエに対する殺虫効果及び残留効果について実験を行い、その結果について報告した（防殺虫燻煙剤の研究 I. 日本衛生学会総会・千葉・1952, II. 日本公衆衛生学会・岡山 1953）。今回は同様の燻煙剤を使用してシャツを燻煙した場合、それに附着するシラミ成虫及び卵に対して如何なる効果があるか、又燻煙後薬剤の附着するシャツを一定期間着用した場合のシラミに対する残留効果如何をしらべるために実験を行つた。まず木製ロッカー（体積 15 立方尺）内にシラミ成虫及び卵を附着させた 10 枚或は 5 枚のシャツを吊下げ、その中央直下の位置に本剤 10 g 入 1 箇（BHC 及び DDT 各 15% 含有）を点火燻煙させ 5 時間燻煙した。その結果シラミの成虫は 3 時間以内の燻

蒸ですべて死滅するが、卵は 5 時間の燻蒸でも影響を受けないことがわかり、又燻蒸後のシャツを 1 週間着用した場合は最早殺虱効果が消失することがわかつた。しかし本法も、燻煙時間及び量などをかえることによつて、より完全な殺虱効果が期待され、特に集団生活者のあいだに應用が可能であると思われる。〔神奈川衛研〕

西日本産蠅類の研究 I 蠅トラップによる諫早地方での調査 末永 敏

Suenaga, O.: Studies on the flies in West
Japan I Flies trapped at Isahaya Area

西日本産の蠅に關しては 1953 年の大島氏の報告の他にみるべきものがない。著者は 1953 年 4 月 21 日以降、魚肉と酒粕をそれぞれ誘引源とした金網製トラップを用い、諫早市の町外れにある研究所の中庭で 3 日に 1 回蠅の捕殺調査を行つていたので、ここに 1954 年 2 月 28 日までの調査結果について報告する。先ず上記の期間に 2 個のトラップで捕殺された蠅の総数は 15,689 個体で、これらは糞蠅科、べつ甲蠅科、花蠅科、家蠅科、黒蠅科、及び肉蠅科の 6 科 15 属 38 種程に分類された。これらの中、22 種は大島氏の報文中にあり、残りの 16 種が長崎県での新記録となるわけである。尚これら 38 種の他にも若干の不明種や雑多な昆虫類が捕殺されたが、ここでは一応除外した。次に各種の捕殺成績をみると、黒蠅が圧倒的に多く、第一位はオオクロバエの 21.9%，第二位はケブカクロバエの 21.1%，以下ミドリキンバエ（18.7%）、センチクバエ（7.8%）、ヒロズキンバエ（6.1%）、オオイエバエ（5.0%）、ナミニクバエ（3.7%）等の順であつた。尚、各種の雌雄の割合をみると、全体としては雌が多いが、魚を誘引源とした場合と酒粕の場合とでは著しく異り、前者に於て雌が 71.8% であつたのに後者では 51.3% であつた事は興味あることである。最後に季節的消長をみると、4 月下旬には既に各科の蠅の活動が開始されており、5 月の中~下旬には早くも春の最盛期となつた。この成績は大島氏の 1952 年の結果とほぼ一致しており、著者の福井で 1952 年に得た結果と比べれば約 1 カ月早い。その後活動は次第に衰え、7 月下旬から 9 月上旬までは夏の谷と考えられた。尚黒蠅の活動は 7 月中旬から 9 月の末まで全くみられなかつた。9 月中旬から個体数は再び増加し始め、9 月下旬（オオクロバエのみは 11 月上旬）に秋の小山を示し、12 月上旬以後 2 月末までの蠅の活動は殆んど黒蠅のみに限ら

れ、黒蠅以外の蠅の活動は長崎地方では12月上旬を以て終ると考えられる。〔長崎大風土研衛生動物〕

下関市(小月町)及び小野田市に於ける蚊成虫の調査 岡 官 佳

Oka, H.: Mosquitoes of Yamaguchi Prefecture. The results of the survey in Ozuki and Onoda

緒言: 1952年に引きつづいて1953年5月1日~10月31日まで実施した。下関市・小野田市共に10名以上の協力下に毎夜9~10時家内に侵入した蚊を吸虫管で採集した。成績: 下関市で16,756匹, 小野田市15,502匹を採集した。両地の共通種は15種でその外下関では *Anopheles koreicus*, *Anoph. sinensis* 小野田では *Anopheles japonicus* を得た。饒多種は下関で *Cul. pipiens* (34.6%), *Cul. tritaenior.* (30.86%), *Anoph. sinensis* (15.61%), *Armig. obturb.* (9.35%), *Cul. bitaenior.* (5.25%) 小野田で *Cul. pipiens* (53.3%), *Cul. tritaenior.* (30.33%), *Anoph. sinensis* (7.81%), *Armig. obturb.* (3.80%), *Aedes vexans* (1.62%) で其他はいずれも僅少である。*C. pipiens* は両地共5月末と6月初め山をつくり下関では最高の山は6月末小野田では7月中頃最高の山をつくる。*C. tritaenior.* は下関市では5月初山をつくり6月の終りと7月の初め高い山をつくり、小野田市では7月末最高の山をつくり8月初第2の山をつくる。そして9月初と中旬2コの低い山をつくる。*Anoph. sinensis* は下関では5月6月の中旬に夫々小山をつくり7月末と8月初最高の山をつくり9月の初小山をつくつて終る。小野田市では5月初小山をつくり7月の初と終りに大なる山をつくつて終る。降水量との関係は *C. pipiens* は降水量に比例して6月7月に多く、*C. tritaenior.* と *Anoph. sin.* は雨の後或は乾季に多い。日本脳炎は小野田市に於て8月28日初発9月初旬より中旬にかけて計4名発生した。下関市(小月町)には日本脳炎患者なし、考按: 岡山県の蚊と種類及び時を等しくしている。*C. tritaenior.* と日本脳炎との関係は患者発生数も少いが、大体岡山県より名古屋附近のそれに近い。矢張り最高の山より2週間後に発生し興味深い。結論: 1953年5月1日~10月31日まで下関市(小月町)と小野田市にて蚊成虫17種を得た。饒多種は *C. pipiens*, *C. tritaenior.* そして *Anoph. sinensis* では時期的消長は岡山県、名古屋附近に似ていて日本脳炎と *C. tritaenior.* とは一定の関係があ

るように思われる。

〔山口医大臨床病理〕

昭和26年度宇都宮における蚊の季節的消長

倉茂 好雄

Kurashige, Y.: Seasonal prevalence of mosquitoes in Utsunomiya during 1951

昭和26年6月21日から11月22日まで宇都宮市若草町(旧栃木県国本村)の山羊舎において毎週1回、日没前後1時間、吸虫管により蚊を採集した。採集総数は雌2,133匹, 雄5匹, 計2,138匹であつて、*Culex tritaeniorhynchus* 最も多く29.42%で、*Anopheles hyrcanus sinensis* 22.87%, *Armigeres subalbatus* 20.86%, *C. pipiens pallens* 12.54%, *Aedes vexans nipponii* 11.04%, *C. bitaeniorhynchus* 1.03%これにつぎ、他に少数の *Ae. albopictus*, *Ae. japonicus* が見られた。季節的消長を蚊の個体についてみると、7月中旬から急に出現が増加して8月上旬最高に達し、以後多少の起伏はあるが10月上旬までゆるやかに減少してゆく大きな山を形成するのであつて、蚊が全く姿を消すのは10月下旬であつた。次に各種の蚊についてみると、*C. tritaeniorhynchus* はこれと類似した消長を示し、7月上旬から急に増加して7月下旬から8月上旬にかけて最高に達し、以後漸減して9月末にはもはや見られなくなつた。*A. hyr. sinensis* の消長は *C. tritaeniorhynchus* と同様7月下旬から8月上旬にかけて最高の山を示し、8月中旬急に減少するが8月下旬から9月上旬にかけて再び小さな山を示していた。同様なことは当地の *A. hyr. sinensis* の幼虫についても既に観察したことである。*C. pip. pallens* は *C. tritaeniorhynchus* に比べ採集数ははるかに少ないのであるが、前記2種よりも少し早く7月下旬に山を示し、以後漸減し9月下旬には見られなくなつた。*Ae. vexans nipponii* は最も早く出現し既に6月に最高に達しており、以後あまり採集されないが10月上旬まで見られた。*C. bitaeniorhynchus* は僅かしか採集されなかつたが、その出現も遅くて7月下旬に現われて8月中旬最高に達し10月上旬に見られなくなつた。*Ar. subalbatus* は上記諸種の蚊と季節的消長の趣を異にしているのであつて、7月中旬一時多くなるが8月上旬急減し最盛の山は最も遅く、8月下旬から9月上旬にかけて示されており、以後急減して10月下旬までみられた。

〔宇都宮大生物〕